

# 受取人不明(Address Unknown)

2005(平成17)年7月8日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★★



監督・脚本・美術＝キム・ギドク／出演＝ヤン・ドンゲン／パン・ウンジン／キム・ヨンミン／パン・ミンジョン／チョ・ジェヒョン／ミョン・ゲナム／イ・イノク／ミッチ・マラーム（エスピーオー配給／2001年韓国映画／119分）

……『春夏秋冬そして春』（03年）、『サマリア』（04年）を観て感動し、大いに勉強したキム・ギドク監督の第6作目（01年）だが、観終わると「すごい！」のひとこと。1970年代のアメリカ軍基地のすぐ側にある村が舞台だが、登場人物たちそれぞれの「哀しみ」や「苦悩」がスクリーン上にもものすごい迫力でぶつけられてくる。そして、「なぜ人間はお互いにわかりあえないのだろう」「なぜ人間はみんな不幸になるのだろう」との思いが……。『苦悩』から逃れられない人間たちに思いをはせながら、「人間論」「人生論」をぶつけあう映画として最適！ 法科大学院でも教材として活用してもらいたい、とつい思ってしまったが……？

## キム・ギドク監督の第6作目！

キム・ギドク監督の『悪い男』（01年）は見逃したままだが、私は『春夏秋冬そして春』（03年）と『サマリア』（04年）を観て感動し、キム・ギドク監督についてはかなり「勉強」した。それによると、この直近2作品の作風は大きく変化した。それまでの『悪い男』をはじめとして、キム・ギドク監督の作品に登場する男の主人公たちはヤクザや売春婦など反社会的な存在ばかりとのこと。『悪い男』が第7作で、その直前の第6作がこの『受取人不明（Address Unknown）』（01年）。さて、この映画の主人公たちは……？

またパンフレットによれば、この『受取人不明（Address Unknown）』は、キム・ギドク監督を「韓国映画界の異端児」から「世界のキム・ギドク」へと評価

を決定づけた傑作と書いてある。さて、その評価は本当だろうか……。

## 舞台は1970年代のアメリカ軍基地近くの村

具体的な場所はわからないが、日米安保条約と同じような日韓軍事同盟条約を締結している韓国にも、日本と同じようなアメリカ軍の基地があり、そこはいわば治外法権の区域。毎日のようにジェット機が飛び交い、米軍兵士たちが訓練をくり広げているが、基地内に韓国人が自由に出入りできないのは当然。

日本では、1960年に日米安保条約が締結された後、2004年イラクへの自衛隊派遣がなされるまでは「平和状態」が続いていたが、韓国では1965年から始まったベトナム戦争への韓国軍の派遣など、日本以上に生々しい「戦争体験」がある。

この映画はベトナム戦争以前だが、韓国では1950～1953年の朝鮮戦争の後遺症を引きずっている。そんな1970年代のアメリカ軍基地近くの村がこの映画の舞台だ。

## チャングク家族は？

この映画には突出した主人公はおらず、ほぼ同列の3人の主人公が登場する。その第1は「ハーフ」のチャングク（ヤン・ドンゲン）。『受取人不明（Address Unknown）』というこの映画のタイトルは、チャングクの母親（パン・ウンジン）が、アメリカに帰ってしまったチャングクの父親である黒人米兵に宛てて出している手紙が毎回戻ってくることからつけられたもの。

チャングクと母親は、基地の金網近くの「廃バス」で生活しているが、そこには母親と一緒に生活している義理の父親ともいべき犬商人（チョ・ジェヒョン）も……。さて「犬商人」の彼がどんな仕事をしているのかは映画を観てのお楽しみ（？）だが、この映画を観ると、「犬の肉」を味見しようとする意欲がなくなるかも……。 「生活のため……」 と言えば、誰も何の反論もできなくなるのが当然だが、この映画を観れば、動物愛護協会やペット大好き人間から抗議が出るのはある意味当然。しかし、スクリーン上で展開されるこのチャングクの家族の物語を観れば、そんなわかりきった抗議（？）など問題にできない「重み」が……。

## ジフムの家族は？

無口で孤独、そして自分の気持を誰にも見せないチャングクの唯一の友人が、気が弱くケンカにも弱いジフム（キム・ヨンミン）。ジフムは朝鮮戦争で右足を負傷し、足を引きずっている父親（ミョン・ゲナム）と2人で生活しながら米兵相手の肖像画店で働いていた。そしてこのジフムは、後述のウノク（パン・ミンジョン）に対して恋心を……。

この父親の自慢は朝鮮戦争で「北のやつらを3人も殺した」ということだが、勲章をもらっていないため、周りの人たちはそれを半分疑っていた。しかし真相は……？

この映画を観て驚いたのは、1970年代韓国では「実用的な武器」として弓矢が使われていたこと。父親は、足を引きずりながらもそんな弓矢愛好家の中ではピカーの存在だった。そんな弓矢がこの映画のストーリー展開では大きな役割を……。

## ウノクの家族は？

さすがキム・ギドク監督。映画の冒頭、印象に残るシーンが……。ノコギリで木を切って簡単な銃をつくり、火薬で弾を発射させることは、危険だが面白い遊び。冒頭、そんな銃づくりのシーンが登場し、続いて女の子の頭の上ののせ定的に向けて銃の発射実験を。さて、その結果は……？

この女の子が今は高校生となったウノクだが、なぜか彼女はいつも顔の右半分に髪の毛がかかったまま。これでは髪が邪魔して右目が見えないのでは、と思っていたが……？ ウノクは母親（イ・イノク）と兄の3人暮らしだが、その生活はチャングクやジフムと同じく貧しそう。もっとも、廃バスの中で生活しているチャングクに比べれば、ウノクやジフムは家があるだけマシなのだが、ウノクの部屋を見ていると1970年代の韓国の生活の貧しさを実感……？ ウノクは、ジフムが自分に対して好意を持っているのは知っているが、素直になれず、行き違いも多い。しかしある日2人は……？

## ヘンな米兵の登場！

米兵の訓練では、金網の中ばかりではなく、外に出ることも多いから、一般人がこれと接触することもある。またもちろん休暇で町に出た米兵が、一般人と仲良くなるケースもありうるということ。

そんな中、ウノクに興味を示す、米兵（ミッチ・マーラム）が1人いた。彼は軍隊での訓練が嫌でたまらず、早く抜け出したいと思って、イライラしているよう……。その心の安らぎをウノクに求めていたわけであったが……？

アメリカ人は女性に対して優しいのが特徴……？ 彼が示した「好意」に甘えたウノクは、その後彼と懇ろの仲に……。しかしそのためウノクは「アメリカ人に身体を売った淫売」と兄から罵られたり、ジフムが嫉妬に苦しんだりとさまざまな波紋を……。

そして次第に状況が変わっていく中、このヘンな米兵は、村人と戦ったうえ、軍に対しても反対し遂に……？

## 何ともショッキングですばらしい映画！

キム・ギドク監督がもつ「激しさ」と「重々しさ」、そして人間性の本質をトコトン掘り下げていく結果として見えてくる「宗教性」という特徴がこの映画でもはっきりと……。そのため、映画上映中はスクリーンに集中させられるうえ、映画が終わるとある意味グツタリと疲れ、「ああ、すごかった」と思わされることになる。混血の主人公チャングクをはじめとして、なぜこの映画に登場する人物たちはみんな苦悩を背負って生きていかなければならないのだろうか、と本当に考えさせられてしまう。なお最後に、チャングクがお湯を沸かしてタライに入れ、母親の身体をお湯でふいてやった後、母の乳房に入れ墨された父親の名前をナイフで削りとり、お湯が血でまっ赤に染まっていくシーンなどは、まさに「キム・ギドクの世界」そのもの……。こんな映画について、是非あなたの感想を聞かせてほしいものだ。

2005(平成17)年7月9日記